

第二十回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

伊藤 邦武 著『パースの宇宙論』（2006年9月8日 岩波書店 刊）

伊藤 邦武 いうくにたけ 昭和24年（1949）生まれ。神奈川県出身。専攻は、哲学。京都大学文学部卒業。同大学大学院文学研究科博士課程修了。スタンフォード大学大学院哲学科修士課程修了。文学博士（京都大学）。京都大学大学院文学研究科教授、文学研究科長（受賞時）。現在は京都大学大学院文学研究科教授。著作は、『パースのプラグマティズム』、『人間的な合理性の哲学』、『ケインズの哲学』、『偶然の宇宙』、『宇宙を哲学する』、訳書に、パース『連続性の哲学』、ジェイムズ『純粹経験の哲学』、他がある。

受賞のことば

天才的思想家パースの名前は比較的良好に知られていますが、その研究者は世界的にみてもそれほど多くないと思います。私がパースを勉強しはじめたのは今から三〇年程前のことですが、それ以来学問上のよき師や友人に恵まれて、はげまされてきました。この度和辻哲郎文化賞を受賞することになりましたことは、本当に望外の喜びでありまして、心から感謝申し上げたいと思っております。私は京都で哲学の手ほどきを受けてからアメリカの大学院にも行ったのですが、そこでの「風土」の相違ということに強く印象づけられると同時に、異った風土や領域の架橋ということが、哲学にとって非常に重要な課題ではないかと考えるようになりました。そしてそうした考え方は、パースやジェイムズのようなアメリカ草創期の哲学者にとっても、西田幾多郎や和辻哲郎のような日本の哲学者にとっても、非常に強く意識されていることであったことを、最近になってようやく実感として理解できるようになりました。今後とも、科学と宗教や芸術など、異種的な思考世界の対話の可能性をさらに深く掘り下げていきたいと考えております。

《選考委員評》

坂部 恵

ウィリアム・ジェームズとともにプラグマティズムの創始者であるパースについては、戦後、上山春平氏らによる紹介・導入があり、勁草書房からの三巻著作集（一九八五～八六）を始めいくつかの労作があるが、総体的に見ればわが国での研究は比較的手薄な状況であった。（欧米においても、多くはない。）比較的理解の容易なジェイムズ、デューイらにくらべて、あまりに先駆的な着想が多く、反面プラトニズムや中世のスコラ的実在論の伝統との深い関与なしには十分理解出来ぬ精神的奥行きを深さをも兼ね備えて、さらには、まとまった著書がひとつもなく思想が多くの論文に散在しており、完全な全集はまだ刊行途上という文献的事情も手伝って、研究者の接近を妨げていたのである。

著者伊藤氏は『パースのプラグマティズム—可謬主義的知識論の展開』（勁草書房、一九八八年）から二十年近い研鑽を重ねた上、今回の『パースの宇宙論』を書き下ろされた。パースの哲学のきわまるところに、きわめて数学的・形而上学的な宇宙論があり、ホワイトヘッドがそれを継承するところから独自の宇宙論を築いたことはよく知られているが、その全貌はしかとは見定められぬままに今日まで経過したとあってよい。伊藤氏の今回のお仕事は、この欠落を一気に埋める、完成度の高い、世界的に見ても画期的な業績である。エマソンを通して、シェリング、スエーデンボルク、クザーヌス、ライプニッツらの深い影響を受け、一方で独自の記号論、カテゴリー論を開拓しながら、それらの総合の上に独特のコスモロジーを展開するさまが、パースの思考の根幹をなす、「偶然主義」、「連続主義」、「アガペー主義」の解明を核として明快に叙述されている。現代の数学の展開や、新しい宇宙生成論、多世界宇宙論を先取りする着想がパースにあることを見定めるあたりは、著者の目配りの広さをあかしする本書のメリットの一つであるといつてよいだろう。

関根 清三

チャールズ・パースは、プラグマティズムと記号学の創始者の一人として、また合衆国の生んだ最も多面的で深遠な哲学者として知られる。更にはその独善的で狷介な言動によって一九世紀後半のアメリカの保守的な学界から排斥され、赤貧と病苦の中で後半生を送った人物としても知

られているだろう。また、そうした境遇で出版されることもなく未完の草稿も多い中、独自の宇宙論を構想していたこともつとに知られながら、その解明は欧米でも充分になされていないようである。それはひとえに、書き散らかされたアイデアを総合し、しかも単に哲学だけでなく、数学や自然科学を踏まえ、また神話的・詩的な想像力も豊かな、パースの多面的な思考を統合的に捉える、稀有な力量が研究者に要求されるからである。そうした研究状況の中で伊藤邦武氏が本書において、パースの宇宙論を正面から周到精細に論じられたことの意義は、まことに大きいと言わねばならない。

氏の精神史家としての確かな目は、パースの宇宙論が生れる背景としてエマソンらによるアメリカ・ルネッサンスの精神的高揚の時代から説き起こし、そのスフィンクスの謎の由来を、古代ギリシア・ヘブライの古典にまで遡って探索活写する。他方、現代の科学的宇宙論、特にビッグバンに始まり進化し続ける構造において宇宙を捉える進化論的宇宙論や潜在的な無数の宇宙からなる多宇宙論を展望して、そうした宇宙論の先駆者としてパースを位置づける。そしてあらゆる存在が、偶然性、規則性、習慣化という三つの元素からなるとする、パース独自のカテゴリー論を、位相幾何学、グラフ理論との対応を考慮しつつ押さえて、その宇宙論の構造もここから解明するのである。すなわち、閃光がひらめき、無の混沌から偶然的に現出した宇宙は、自己否定のアガペー的習慣化を経て、偶然性のまつわる精神を否定した機械論的な物質の規則性へと完結するというのである。神的なアガペーの愛は完全だが、自己否定的に不完全を生み、規則的にすぎる不完全という無へ戻ろうとする。パースはこれをスウェーデンボルクの影響下で「贖罪」と呼ぶ。しかしそこに現出するのは、単に精神を否定した物質の規則性だけでなく、精神にとって合理的で美しい調和のとれた宇宙でもあると、伊藤氏はこれを読み解くのである。

こうした宇宙論の現代的射程は、ひとり進化論的宇宙論、連続体の数学といった科学との対応だけでなく、カテゴリー論の革新、宗教的神話の再解釈、更には愛の哲学、場所論的な形而上学との呼応なども示唆しつつ、まことに広く深いように思われる。そうした可能性に目を啓かせてくれる、伊藤氏の冒険的思索と探求、学殖と手練の語り口に心から感謝したい。

黒住 真

伊藤邦武氏の『パースの宇宙論』は、一九八五年『パースのプラグマティズム』に始まる氏のパース論の結集であり、パースの宇宙・存在界の生成を美しくまた論理的に示している。

プラグマティズムは、人が何でも実用化・道具化する営みであるかのように理解されることもある。しかし、実はそこには人間の経験そのもの・存在への問いがあり、その宗教的な経験が形而上学さらに神学とさえなっている。パースは、その創始者というべき人である。彼は、十九世紀前半のアメリカに生まれ第一次世界大戦前に亡くなるまで、人生においてこの根本的な問いを、大学から離れた場所で、表現し続けた。彼の親友たるW・ジェイムズの哲学や宗教的経験は、一般にはよく知られ、さらに日本近代の西田幾多郎・和辻哲郎たちにも影響を与えている。しかし、一方その根本のところは何があったか、パースが一体誰であったかは、あまり知られていない。彼の名前はあっても、その哲学・倫理学の内容については空白ともいえる状態にあった。伊藤氏は、そこに深く踏み込み、パースにおけるカテゴリー・存在・宇宙をわたしたちに明確に伝えてくれる。その意味はとても本質的で示唆されることが大きい。

伊藤氏の研究は、パース論だけではない。日本でただ経済学者ととらえられるケインズについて、あるいは重要であるが意外に把握されていないパスカルについて、彼らの哲学やその限界面や偶然性を的確にとらえる。それらはまたコスモロジーへの問いとして、中世以前の哲学にも繋がっている。またパースの周囲からは、西田・鈴木大拙、さらに折口信夫への連鎖も指摘される。ここには文字通り「連続性」があり、それは実際の出来事としてグローバルな動きでさえある。ここにある進化論的多宇宙論は、神秘なる「アガペー」（無限愛）に繋がる。「三項」のカテゴリーは、伊藤氏は触れていないが、神学における三位一体が示唆されもする。

伊藤氏が適切に指摘されている多くのテーマは、周囲の学者たちに重要な方向をいくつも示す。パースにおいて神学がまた倫理学がどう成り立つか（あるいは成り立たないのか）、そこに踏み込んで今後さらに具体的なことを教示していただきたいと私は個人的には願う。ともあれ、本書また伊藤氏の種々の仕事は、世代間また周囲の多宇宙的な人々に、重要な手がかりを与えてくれる。二十一世紀を方向づけるお仕事だと思う。